經濟論叢

第124巻　第1·2号

フランスの貴族商業論のひとこま（下）……木崎喜代治　1

Currency Board System 生成の論理,
1893–1917年（下）……本山美彦　25

マルクスの欲望論……神谷　明　46

「科学的管理」批判と効率・人格・民主主義…陶山計介　68

資金問題と利潤率決定……山下　清　87

経済学会記事

昭和54年7·8月

京都大學經濟學會

I　ディルクの剰余価値論

京都大学大学院学生　岸　　徹

（報告要旨）

本報告はCharles Wentworth Dilke（1789–1864）の剰余価値論について報告しようとするものである。本報告が対象としているパンフレットは *The Source and Remedy of the National Difficulties*, etc. と題され，1821年に匿名で出版された。彼は所謂リカーディアン・ソーシャリストの一人とされ，P.レイヴンストーン，T.ホジスキン等とともに，「資本家社会の自由主義的批判」を行ったものとして位置づけられている。この点で彼らは，同じくリカーディアン・ソーシャリストと言われる人々の中でも「協同組合主義者」（C.ホール，W.タムスン，J.グレイ，T.R.エドモンズ，J.F.ブレイ）らと区別される。その相異点は，「協同組合主義者」たちが，資本家社会の弊害に対してそれを克服するものとしてポジティヴに協同組合を提示するのに対して，ディルク等はむしろ資本家社会を攻撃する点にその特徴があるように思われる。以下では次の2点について，ディルクの所説を検討する。

第1に。ディルクは剰余価値を「剰余労働」として示し，かつその絶対的な形態で把握していること。剰余価値の絶対的な形態での把握とは，本質に還元された剰余労働がいかなる形態をとって現われ出るかを問うものである。すなわち，資本家社会において

この剰余労働を強制するものは資本であり，資本がこの剰余労働を領有するのである（剰余価値の発生＝資本の発生）。このことによって剰余労働（内実）は剰余価値という形態をとるのである。この内実と形態の癒着の批判的了解＝解体こそ，絶対的剰余価値論の課題であると思われる。この課題を問うことによってのみ，「資本の歴史的必然性」が把握され，「資本の歴史的根拠づけ」が行なわれうるのである。ディルクはこのことを把握することによって，必要労働を超える時間が他人のための「剰余労働」時間として現われるのでなく，万人のための「自由処分可能時間（ディスポーザブルタイム）」として万人によって享受されることを主張するのである。

そこで第2に。ディルクは真の国民的富を万人の「自由処分可能時間」として把握していること。それは各人の精神的・知的発展を可能にする時間として，労働時間以外の時間である。それは資本家社会においては資本家および不生産的階級を養う手段に転化しているのであるが，ディルクはこれが万人のものとなることを主張するのである。

リカードゥは富を使用価値の増大において把えるとともに，できるだけ労働人口を少数にし，自由処分可能時間の享受者をできるだけ多数にすることを主張した。だが，彼にあっては一方の享受者は他方の労働人口を犠牲としてのみ存在しえた。ディルクはこの対立そのものを揚棄することを主張したのである。